

ソ連と三国軍事同盟 ——再検討の試み

ワシーリー・モロジャコフ

ソ連と日独伊三国政治・軍事同盟というテーマを再検討する際、主要な問題として次の二点が提起できる。

1) ソ連と日独伊三国同盟との協力、政治的および軍事的なパートナーシップが基本的に可能であったのか。

2) そのパートナーシップの結果として、ユーラシア大陸ブロックとしての日独伊ソ四国同盟の締結が可能であったのか。

歴史的に見れば、1940年9月27日に公式に締結された日独伊三国同盟は、1936年11月25日に締結された日独防共協定から発展した。オリジナルな防共協定の主要な提案者であったリッベントロップ（当時ヒトラーの対外政策相談役）の見解によると、日独防共協定は国家としてのソ連とイデオロギーとしての共産主義およびそのプロパガンダと国際活動に反対する幅広い政治的同盟であった。そして、他国もその同盟と協力し、また同盟のメンバーになる可能性が存在した。リッベントロップは、イタリアとポーランドをはじめ、ハンガリー、イギリス、中国に対しても防共協定への参加を呼びかけていたが、1939年以前においては、1937年11月6日にイタリアの参加を見ただけであった。翌日の11月7日はロシア革命の20周年記念日だったので、おそらくそれがスターリンへの「プレゼント」であった。

しかし、リッベントロップの日本側の主要な相手になった大島浩（当時駐独陸軍武官）は、防共協定を主に反ソ政治同盟と考えて、この協定を軍事的協力、少なくとも軍事的情報交換の仕組みとみなした。

ソ連政府およびそのプロパガンダの国際的ツールであったコミンテルン（第三共産主義インターナショナル）は、防共協定を「新しい戦争を準備する侵略者の同盟」と公式に評価・批判した。ソ連政府（内閣）に限らず、スターリン書記長自身をはじめソ連共産党の首脳はいつも、国家としてのソ連と国際的仕組みとしてのコミンテルンの活動を区別して発言していたが、世界の誰もその発言を信じなかった。そして、防共協定も「建前」は国際的イデオロギー同盟の思想と行動に反対していたが、その反ソ連という「本音」は隠すことができなかった。

1938～39年の間、ナチ・ドイツを中心とした防共協定強化のプロセスが行われたが、新しいグローバルな同盟を締結するための努力は失敗に終わった。その事情はよく知られて研究されているので、ここではその過程を具体的に再検討する必要はない。1938年

2月にドイツ外相のポストに任命されたリッベントロップの政治思想と行動はどんどん反英的になり、彼はイギリス・フランスと戦うために必要な同盟を締結することについて考えはじめた。リッベントロップ外交の研究者ミヒャルカ氏はその見解として、1936年の防共協定が「形の上で反共産主義（*pro forma antikommunistisch*）であったが、事実の上で反英的（*de facto antibritisch*）であって」¹、そしてある程度ユーラシア・ブロックへの長い道のりへのステップになったと結論づけた。当時、「スターリンも将来的には防共協定に参加するかもしれない」という冗談がよく言われたのである。

1938～1939年におけるイデオロギー的な防共協定を新しい政治・軍事同盟に変える努力が失敗に終わった原因は、東京の近衛内閣と平沼内閣、特に有田外相の立場と活動にあった。日本政府は、ヨーロッパ諸国との軍事同盟が、明らかに反英同盟への参加につながるため危険であると評価したことや、支那事変の迅速な解決を中心としたアジア問題を主に懸念したことから、グローバルな軍事同盟の責任を負う希望がほとんどなかった。そして政治・軍事同盟への参加を遠慮して、総合的な宣言に限定した施策を行った。それは有田の「薄墨色の外交」とよく言われていた。それは、ドイツが日本の政治的な同盟国になるが、日本が軍事的な責任を負わないような協定であった。

細かく見れば、1939年4月20日の夜が特に重要な時点である。ベルリンで、ヒトラーの50歳の誕生パーティーが開かれた直後、リッベントロップ外相は駐独大使の大島浩および駐伊大使の白鳥敏夫と会見して、次のように警告した。日本政府が速やかにドイツとの政治・軍事同盟を締結しない場合には、ドイツはやむを得ずソ連との関係を急速に正常化する方策しかない、ということであった。

有田外相と違って、両大使はできるだけ早くドイツ・イタリアとの政治・軍事同盟を締結することの重要性、また必要性を強調しており、そのために積極的にリッベントロップと行動をとともにしていた。ナチ外相の警告の内容は信じられることではなく、また思いがけないことでもあった。大島大使はリッベントロップの言葉を「ドイツの普通のおどし文句」と評価したが、白鳥大使は警告を真剣に受け取り、その内容を直ちに有田外相に知らせた。しかし、有田もその貴重な情報をほとんど構わずにおいた²。

モスクワから見れば、当時の状況では、ソ連がイギリス・フランスとの政治同盟を締結する努力が失敗に終わったことはかなり「マイナス」であったが、同時に新しい防共協定と見られていた日独伊同盟の失敗が大きな「プラス」であった。しかし、最も「プ

¹Wolfgang Michalka, *Ribbentrop und die deutsche Weltpolitik 1933-1940: Außenpolitische Konzeptionen und Entscheidungsprozesse im Dritten Reich* (München, 1980), S. 137-138. 和文は、三宅正樹『ユーラシア外交史研究』（河出書房新社、2000年）48頁。

² 両大使の電報は、『現代史資料』第10巻（みすず書房、1963年）257-259頁。または有末精三『有末精三回顧録』（芙蓉書房、1974年）、473-479頁、野村実『太平洋戦争と日本軍部』（山川出版社、1983年）174-175頁など。

ラス」になったことは、独ソ関係の改善と、後の条約締結であった。ヒトラーとリッペントロップは、日本との三国同盟の代わりに、イタリアとの政治・軍事「枢軸」とソ連との政治的不可侵条約の道を選んだ。そのため、ドイツは1939年のノモンハン事件のとき日本を支持せず、ソ連との関係は友好的なものに変わった。

ノモンハン事件が勃発した1939年5月は、独ソ関係がまだ緊張しており、日独交渉も続けられていた。事件の際、独ソ間の相互理解はかなり早くなったが、日独間の相互理解はまだ明らかではなかった。その結果、ドイツとソ連は8月23日に不可侵条約を締結した。

独ソ不可侵条約は、ユーラシア大陸ブロックへの最初の大きなステップになった。ユーラシア大陸の強大国であるドイツとソ連は、激しいイデオロギー闘争にもかかわらず、ないしその闘争を終わって、先に二国間関係を改善し、後にパートナーシップの関係を作って、本当に同盟の状態に至ったと結論できる。そして、少なくともソ連と枢軸国との協力関係が絶対に不可能だったとはいえない。逆に可能であったし、ある程度実現されたと結論できる。

独ソ不可侵条約の締結は、東京に大きなショックをもたらした。反ソ対立を一つの可能性とした同盟者さえも日本を裏切ったという感があった。その結果、有田外相がドイツとの防共協定強化の交渉を停止して、その後平沼内閣が「欧州の天地は複雑怪奇」という珍声明（8月28日）とともに総辞職した。同盟可能と見なされたドイツが、主要な敵と見なされたソ連の同盟者になるという危険な状態であった。しかし、その結果として、日ソ関係はノモンハン事件の後で、またノモンハン事件の影響でかなり早く改善された。日本の首脳は、日本が同盟国でなかった状態の危機性を考えて、ソ連とドイツとの関係を少なくとも改善する必要があると理解したのである。

1939年の秋から1940年の夏まで、ソ連とドイツとの協力関係が積極的に発展して、日ソ関係が明らかに改善されたが、阿部内閣と米内内閣（有田外相）の下で日独関係が停滞状態に陥った。1940年7月の政権交代の際、第二次近衛内閣の外相に任命された松岡洋介は、ベルリンとローマとの交渉を再開して、ソ連との新しい友好関係を樹立する方針を宣言した。そのため松岡がユーラシア大陸ブロック論の論者であると言われているが、日本でこのアイディアをはじめて論じた人物は、松岡ではなく、外交官であり政治評論家であった白鳥敏夫であった。

1939年10月13日、駐イタリア大使を退任した白鳥は、帰国した当日、「東京朝日新聞」の記者と会談して、次のような興味深いことを述べた。「独ソ不可侵条約で我国ではドイツが裏切ったと非常に憤慨しているらしいがドイツをとがめるのは酷だ、精しい事

情を知れば同情すべき点もある」³。恐らく独ソ不可侵条約は、反ソ・反共であった白鳥の欧州観、またソ連観の180度の転換点になった。白鳥の見解によると、独ソ不可侵条約の成立や欧州大戦の勃発によっても日本の置かれた立場は殆ど変わらない。世界新秩序建築をめざす日独伊ブロック（+ソ連?）と status quo（現状）を守っているデモクラシー国家の英米仏ブロックとの対立を前提とし、停止されていない中国の国民党政権援助、日米通商航海条約破棄通告（1939年7月26日）等に示された英米の対日敵性を考えれば、独伊ソとの提携強化は当然であろう。

1940年9月27日、日独伊三国同盟が締結された時、ソ連とナチスドイツとの関係は同盟者の関係であったといえるが、両国には相手に対する不信があった。ソ連とイタリアとの関係は、1939～1940年におけるフィンランドとの「冬戦争」のため悪化したが、ドイツの援助でまた友好的関係を回復した。ソ連と日本との複雑な関係もノモンハン事件直後かなり通常のものになった。こうして、ソ連と三国同盟との政治的な協力の可能性が存在した。

歴史における「可能性」の問題について三宅正樹先生が特に興味深く論じている。長くても引用する必要がある。

「このような議論は、しばしばいわれる、『もし……ならば』の方式を、歴史に適用しようとするものにほかならない。歴史に『もし』はない、と断定してしまえば、身も蓋もないことになるが、それは、歴史について必然論を前提している訳である。歴史上のある時点で、政策決定者が a のコースを選択するか、b のコースを選択するか、c のコースを選択するかによって、結果はおおいに異なってくるのは当然であるが、その時の政策決定者が a のコースを選択したからといって、それだけが必然のコースとは断定しにくいのである。

歴史学者は、歴史上のある出来事を、それがもたらした結果まではっきりしてしまった地点に立ってみているから、この場合でいえば a のコースしか選択の余地は初めからなかったのだ、という見解に傾きやすい。しかし、よく考えてみると、ここにはある錯覚が作用している。政策決定者が a のコースを選択する時点に立ち戻ってみれば、前途、つまりこの選択が生み出す結果は見えていない。いわば五里霧中の状態で選択がおこなわれるのである。このことを歴史家はしばしば忘れていている。あるいは、忘れていないにしても、それほど強く意識していない。

それから、政策決定者についていえば、本当は五里霧中の状態で選択がおこなわれるのでは困るのである。五里霧中としか見えない中に、何とかして見通しを

³ 「東京朝日新聞」1939年10月14日。

つけて、aのコースを選択肢aと呼ぶとすると、選択肢aを選択すればどのような結果が生ずるか、選択肢bを選択すればどのような結果が生ずるか、cならどうか、さらに、d、eならどうなるか、見極めることが、政策決定者から要求される。

歴史学者は、その時の政策決定者がある選択肢を選択した結果をよく知っているから、その結果にもとづいてその時の政策決定者の決定を自由自在に批判する。よくいわれる歴史学者の『あと知恵』（ハインドサイト）といわれるものがそれである。

しかし、すぐれた政策決定者は、本当は、歴史学者が『あと知恵』によって知っている、その選択の結果を選択の時点において予想できなければならない筈である。しかも、すぐれた政策決定者は、実際に選択する選択肢aだけでなく、選択することを避けるb、c、d、eなどの選択肢についても、それらを選択した場合にどのような結果が生まれるのかを、見極めることができなければならない。五里霧中といって済ますことなど許されない。

ある選択のコースと、それが生み出す結果とを含めて、シナリオと呼ぶとすれば、歴史学者は、ふつう現実化したシナリオ、この例では選択肢aとその結果とを合わせたシナリオaだけについて研究することを要求される。シナリオaが現実化したのは、どのような政治的、社会的、経済的条件によるのかが、詳しく研究される。

ところが、政策決定者は、シナリオaについて、正確に予測を立てなければならないばかりでなく、シナリオb、c、d、eについても、正確に予測を立てなければならない。この作業をしなければ、なぜ今、aを選択しなければならないかが、はっきりしてこないからである。このような選択肢とシナリオの問題は、歴史を考える上で重要な問題だと思われる⁴。

報告者は、三宅先生の以上の見解に全く賛成である。1940～1941年に日独伊ソ四国同盟、あるいはユーラシア・ブロック（大陸ブロック）が実現しなかったのは、歴史の事実として「シナリオa」であると言える。しかし、「シナリオb」としてそのような同盟の実現可能性を意識しないことは誤りであろう。

報告者の見解では、1940年9月27日の日独伊三国同盟締結から1941年6月22日の独ソ戦争勃発に至るまでの時期には、日独伊ソ四国同盟の可能性が存在したのである。その可能性が存在するのならば、歴史学者は、その問題を学問的に研究しなければならない。少なくとも、日本でも、ドイツでも、恐らくソ連でも、四国同盟論の擁護者が存

⁴ 三宅正樹『ユーラシア外交史研究』（河出書房、2000年）124-125頁。

在したのは確かであると結論できる。また三国同盟の十分な実現のためにソ連の参加は、少なくとも地理的に、地政学的に必要であった。

ソ連と三国同盟との関係における転換点は、1940年11月12～13日におけるモロトフのベルリン公式訪問であった。ユーラシア・ブロック論から見れば、日独伊三国同盟締結直後、強化された枢軸とソ連との関係は最も重要な点になった。モロトフはベルリンを訪問し、ヒトラー、リッベントロップ等と交渉して、枢軸国とソ連との提携を具体的に討議したことはよく知られているので、それについて多くを述べる必要はない。言うまでもなく、モロトフのベルリン訪問はユーラシア・ブロックの運命に対する曲がり角になった。

ドイツおよびソ連の外交資料から見れば、ヒトラーはソ連が三国同盟との直接的な協力および四国条約の締結を提案して、リッベントロップがその同盟条約の草案も執筆しそれをモロトフに紹介した。モロトフはスターリンの命令で原則的に賛成したが、ソ連側は11月25日に追加の条件を提案した。スターリンは殆ど最後までベルリンからの返事を待っていた。しかし、ヒトラーが逆提案に基本的に反対で、同年12月、ソ連に反対して戦争を行うことを完全に決定した。

そして、1940年11月にモロトフとの会見以後、ヒトラーは、リッベントロップと違って、四国同盟のアイディアを捨てた。逆に、松岡は1941年春のベルリン、ローマ公式訪問以後にもそのような提携の可能性が現実に存在すると考えたらしい。ヒトラーも、リッベントロップも松岡と会見する時、独ソ関係の悪化について明白に述べて、また戦争がありえないことではないと示唆したが、同盟国である日本の外相に対ソ戦争の決定を知らせなかった。それはヒトラーの直接の命令であった。

松岡もスターリンも、独ソ同盟が不可能になった、と理解した。それで（それにもかからず、と言えるかもしれない）スターリンは日本との中立条約を締結した。恐らく松岡の場合には、ソ連との中立条約を締結する決意はある程度ヒトラー、リッベントロップとの会見の結果であろう。その条約により、ソ連と三国同盟との関係は最後の段階に入った。

1941年4月26日、ハウスホーファーは、1940年の著作『大陸ブロック論』を日本語に翻訳した窪井義道衆議院議員宛の書簡で、「日ソ中立条約は一つの偉大な視野を持った政治家の傑作であります。何故ならばそれは一つの偉大なる地政学的観察いや敢て申せば、一つの必然性に即したものだからであります」⁵と述べ、日ソ中立条約の地政学的意義を高く評価していた。ところで、窪井は松岡の盟友であった。しかし、この翻訳は1943年だけに出版されたので、世界の事情が十分に変わった時点であった。

⁵ カール・ハウスホーファー（窪井義道訳）『大陸政治と海洋政治』（大鵬社、1943年）1-4頁。

日本の政治・軍事エリート、また知識人の間にこのような傾向が存在したが、1941年6月22日の独ソ戦争勃発がユーラシア・ブロックの可能性を崩壊させたのは明らかである。日独提携の研究者プレッセイセンの評価を使用すれば、独ソ戦争は「事実上地政学の最低点」になったのである。日独伊ソ四国ユーラシア・ブロックの世界的なユートピアは失敗に終わったが、第二次世界大戦期の世界史における重要な問題としてより具体的に研究しなければならない点であろう。

結論として一言で言えば、ソ連と日独伊三国同盟との政治的協力とパートナーシップの可能性が存在したが、四国のユーラシア大陸ブロックは実現されなかった。その主要な原因はヒトラーの立場と行動にあった。

本文の主要な参考資料・文献

ドイツ側の資料は、*Documents on German Foreign Policy. 1918-1945. From the Archives of the German Foreign Office. Series D: 1937-1945. Vol. IV-XIII.* (London: H.M. Stationery Office, 1949-1983)。ソ連側の資料は、*Документы внешней политики* (外交資料) ТТ. XXII-XXIII. (Москва: Международные отношения, 1993-1998) (1939～1941年)。日本側の資料は、『現代史資料』第10巻(みすず書房、1963年)、『太平洋戦争への道』別巻「資料編」(朝日新聞社、1963年)。研究論文は、

1. 『太平洋戦争への道』第5巻(朝日新聞社、1962年)
2. 三宅正樹『日独伊三国同盟の研究』(南窓社、1975年)
3. 三宅正樹『ユーラシア外交史研究』(河出書房、2000年)
4. 三宅正樹『スターリン、ヒトラーと日ソ独伊連合構想』(朝日選書、2007年)
5. 戸部良一『外務省革新派——世界新秩序の幻形』(中公新書、2010年)
6. Carl Boyd, *The Extraordinary Envoy: General Hiroshi Oshima and Diplomacy in the Third Reich, 1934-1939* (Washington: University Press of America, 1982)
7. Vassili Molodiakov, *Nesostoyavschayasya os' Berlin-Moskva-Tokyo* (ベルリン・モスクワ・東京——作成されなかった枢軸) (Moskva: Veche, 2004) (露文)
8. Vassili Molodiakov, *Epokha bor'by - Shiratori Toshio (1887-1949), diplomat, politik, myslitel'* (戦いの時代——白鳥敏夫、外交官、政治家、思想家) (Moskva: AIRO-XXI, 2006) (露文)
9. Vassili Molodiakov, *Ribbentrop. Upryamyyi sovetnik fyurera* (リッベントロップ——ヒトラーの頑強な助言者) (Moskva: AST-Press, 2008) (露文)